

## 子どもを受動喫煙から守るそれぞれの役割

齋藤麗子

十文字学園女子大学

近年、我が国の喫煙率は男性では約30%と減少傾向で、女性は10%を維持している。

男女平均すると20%であり、受動喫煙の被害を受ける子どもも減少していることが期待されるが、子育て中の若い年代に喫煙率が高いことが問題である。健やか親子21では妊婦や子育て中の喫煙をなくす目標が掲げられて久しいが、実現には遠い。

さらに収入の少ない家庭や子どもの貧困と受動喫煙の関係、両親ともに喫煙している状況、喫煙席や喫煙所に子どもを連れて入る保護者、自家用車内の喫煙など、子どもが被害を受けている状況が危惧される。

その中で子どもに関わる人々が虐待の対応と同様に、連携して子どもを守ることを考えねばならない。国や都道府県議員、地方自治体議員などが子どもの受動喫煙防止に少しでも関心を持ち、公共施設の禁煙化に力を注いでほしい。医師や歯科医師は子どもの疾患や症状がタバコに関係しているか疑い、保護者の喫煙状況を質問することをルーチンにしてほしい。看護師はタバコの臭いのする保護者に嫌がられてもそれとなく注意し、子どもを守ろう。教師や保育士、児童相談所職員なども受動喫煙についての正しい知識を得て、保護者に伝え続けてほしい。

オリンピックを機に我が国も他の国と同様に受動喫煙防止条例の制定が、WHO、IOCから求められている。建物内禁煙が世界の常識であるが、このたびの政府の提案では喫煙室の設置が許されてしまう。建物の中で壁を作るだけの分煙が意味のないことはすでに明らかになっているのである。これでは禁煙の場所でも受動喫煙の害が及んでしまうし、ましてや子どもを喫煙室に連れて入ることも出来てしまう。せめて、そのようなことを防ぐために子どもを喫煙室に連れて入ることを禁止して罰則を設けるべきである。

最近は煙の出ない加熱式タバコや蒸気の出る電子タバコなどが宣伝されている。禁煙するための代替品とされたり、禁煙の場所でも使えるとのうたい文句で。しかし、子どもの誤飲事故が我が国でも報告されている。タバコの形をしたお菓子のココアシガレットによる気道閉塞による死亡例ももうすでに報告されている。

また、マッチやライター遊びによる火事など、煙以外でもタバコ関連の事故があるため、子どもを健やかに育てるには多くの注意が必要となる。我が国が煙の無いスモークフリー社会になるために、子どもに関わる我々はそれぞれの役割を再認識しよう。

### 略歴

- 1975年 東京女子医大卒業 東京医大小児科入局
- 1984年 東京都衛生局入都 6区2市の保健所予防課長、所長を歴任
- 1991年 「妊婦と夫の喫煙状況と出生児の影響」で医学博士授位
- 2010年 十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科 教授  
健康管理センター長 産業医 現在に至る

### 現職

- 日本小児科学会専門医
- 厚生労働省健康局 たばこの健康影響評価専門委員会委員
- 4社協 小児科子どもをタバコの害から守る合同委員会委員長
- 日本禁煙推進医師歯科医師連盟会長

